

母親の養育態度と大学生の「友人関係」「社会的スキル」「他者意識」「対人信頼感」の関連について

Mothers' Child-rearing Style and Undergraduates' Personality Traits

梶 本 千 潤 菅 千 索

Chihiro KAJIMOTO Sensaku SUGA

(教育学部第67期生) (和歌山大学)

2019年8月19日受理

要約

本研究では、母親の養育態度と大学生の友人関係、社会的スキル、他者意識、対人信頼感との関連について検討した。測定尺度として「家族関係尺度EICA」「友人関係尺度」「KISS-18」「対人信頼感尺度」「他者意識尺度」を用い、大学生80名に質問紙調査を行った。相関分析の結果、母親の養育態度と大学生の友人関係、社会的スキル、他者意識、対人信頼感との間には有意な相関がみられた。一方、子どもが認知している親の養育態度は、どれほど実際の養育態度を反映しているかに問題が残ることなどが今後の課題として指摘された。

問題と目的

近年、青年の友人関係の希薄化が問題となっている。希薄化とは、人との深い繋がりを持つとしなかったり、持つとしてもそれが得られにくかったりする傾向をいう(白井, 2006)。また、近年の青年の友人関係の特質として、互いに傷つけたり、自分が傷つくことを恐れるために、内面的な関わりを避けて、表面的な楽しさを追い求める傾向が目立つと指摘されている(岡田, 1995)。本来、青年期の友人関係は、親密で内面を開示するような関係、あるいは人格的共鳴や同一視をもたらすような関係の特徴とし、これによって青年は新たな自己概念を獲得し、健康な成熟が促進されるとされてきたが(西平, 1973)、近年ではそのような関係が築けていないと考えられている。

さらに、現代の青年において他者への配慮ができなかったり、他者への関心のなさも問題となっている。内省傾向が低くて友達への気遣いも乏しい「無関心群」(橋本, 2000)や、友人との関係の深まりを避けながら、友人からの評価を気にせず、自己中心的に振る舞う「無関心群」(中園・野島, 2003)が報告されている。このように青年の友人関係において、希薄化のみならず、友人への配慮の欠如や、他者の目を気にしない傾向などが明らかになってきた。

良好な友人関係は大学生にとって良い影響をもたらすと考えられている。たとえば、大学生にとって親しい友人は様々な面でのサポート源であり(嶋, 1991)、日常的なストレス状況に対しても友人からのサポートを享受できることは大学生の感情状態に良好な影響を及ぼすとされている(福岡, 2010)。しかし近年の友人関係の現状では、そのような援助的役割が果たされて

いないと考えられる。また適応的な大学生活を送る上では、入学後に知り合った学友との良好な交友関係を築くことが重要であるともいわれている(Swenson, Nordstrom, & Hiester, 2008)。近年、大学生の不登校問題も注目されており、久保(1995)は、大学生の現在の悩みやコンプレックスにおいて、友人関係に関することが全体の25%を占め、悩みの対処法に関しては自分を受容してくれる他者を持つことや、積極的に人間関係を築いていくことなどによって対処する者が多いと指摘している。そして人間関係に悩み、さらに、その悩みを人間関係の中で解決したり癒したりすることで、自分らしさを感じ、また生きていると感じることが多いとも述べている。

一般に不登校という言葉を目にすると小・中学生などに多い問題であると認識されている。しかし全国規模の調査では(水田ら, 2009)、不登校の大学生数が0.7~2.9%(全国の大学生数約280万人中2.0~8.1万人)と推定されている。不登校の大学生がこれほどまでに多いのであれば、不登校傾向の大学生、たとえば、授業を欠席しがちな学生や大学に行きたくないと思っている学生の人数が相当数に上るという実態(堀井, 2006)も容易に想像がつく。この大学における不登校について小柳(1999)は、大学生の抱える適応の問題として、小学校の高学年から対人関係がうまくいかないと感じ始めるが、恥じて親しい他者に相談できなかったり、周囲が理解できなかったりしたために、この登校にまつわる問題の解決を持ち越して大学に入学するに至るという傾向を指摘している。

一般に大学では、友達と共有できる話題が少なかったり、自分らしい価値観や、臨機応変に対応する柔軟

さや知恵が足りなかったりすると、登校への障壁をうまく乗り越えることが困難となる。また、大学生になるとクラスという居場所がなくなり、自分の居場所は自分で作らなければならないということも、不登校の原因の一つであると考えられている。対人関係や関心の幅広さが大学での適応の重要な鍵となるという報告もあり(小柳, 1999)、不登校の原因として人間関係などの心理的な問題が大きいといえるであろう。

このような不登校問題を解決するためには、どのような取り組みが必要なのであろうか。日本では、こうした傾向の増加を受けて「生きる力」を育てることの必要性が指摘されている(中央教育審議会答申)。この「生きる力」の一つとして社会的スキルが挙げられる。社会的スキルとは、他者と円滑な対人関係を築くための総合的な能力(大坊, 1998)、または他者からの肯定的反応を促し、否定的な反応を低減させることで対人関係を円滑にする能力(菊池, 1988)と定義されている。その場にあった形で自分の気持ちを伝えるスキルや、他者と親密な関係を形成するスキルは良好な友人関係に影響しており(水津・児玉, 2016)、社会的スキルが高いほど大学内の友人からのサポートを得やすく、孤独感の低減にも効果が認められている(堀・島津, 2005)。以上のようなことから、大学生の心理的問題の解決にあたって、社会的スキルの獲得が一つの方策であると考えられる。

ところで、フランスの貴族で、モラリスト文学者でもあるラ・ロシュフコー公爵フランソワ 6 世の「蔵言葉」に『信頼こそ才知よりも交際を深める』という言葉がある。他者との人間関係を築く際に才能や知恵よりも信頼こそが必要だという意味である。良好な友人関係を築くには、この対人信頼感が大切であるといえるが、この対人信頼感に関する研究はまだ多くない。

そこで以上のことをまとめると、本研究では大学生が有意義な大学生活を送るために、「友人関係」「社会的スキル」を中心に、「対人信頼感」「他者意識」に影響を及ぼしている事象について考えることとし、母子関係に焦点を当てることとした。近年、親の養育力の低下に伴い、養育態度は二極化して、放任あるいは過保護・過干渉といった養育態度が問題となっている。養育態度とは、親が子どもを育てるにあたって、意図的あるいは無意識的にとる一般的な態度・行動と定義されている(原田, 2008)。一般に子どもが生まれて初めてこの世で出会い強い絆を形成する相手は母親および家族であり、家族は子どもの社会化の最初の担い手となる(大鷹ら, 2009)。子ども時代を通してどのような母子関係を経験するかは、その後の子どもの社会的発達に大きな影響をもたらすことが様々な研究から実証されているたとえば、村井(2002)は、子どもの問題行動が母親の実際の養育態度ではなく「子どもからみた親の養育態度」と関係していることを指摘している。

また、石津・安保(2009)は、母親の温かさは子どもの抑うつ傾向を低下させ、友人関係や勉強といった学校への適応を促進すると報告している。また八越・新井(2007)は、母親と自分の関係が情緒的に安定していると認知している児童は、母親に対する同一視を通して、良好な友だち関係を形成し維持していくために社会的スキルを学習していくのではないかと指摘している。以上のように、親の養育態度は子どもの社会的発達に影響を及ぼすことが示されているが、こうした社会性を身につけることは、適応的に生きる上で不可欠であると考えられる。

そこで本研究では、母子関係が大学生の性格特性にどのような影響を与えているのか検討することをおもな目的とする。これまでに行われた社会的スキルと親の養育態度の関連性についての研究では、多くが児童を対象としてきた。それは青年期は親離れの時期であり、この段階でのパーソナリティへの影響は、親以外の要因によるところが大きいと考えられているからである(松元, 1997)。また、杉浦ら(2007)によると、親の養育態度が大学生のソーシャル・スキルに及ぼす影響について調査を行ったところ、青年期のソーシャル・スキルの高さには、特に主たる養育者である母親の養育態度が大きな影響力を持っていると報告されている。したがって本研究では母親に限定した調査を行うこととする。

これらを踏まえ本研究では、母親の養育態度と大学生の友人関係、社会的スキル、対人信頼感、他者意識の関連について調査を行うこととし、以下の4つの予測を立てた。

予測1：統制(CO)が高い場合、ふれあいを避ける傾向にある。また自律性(AU)が高い場合、自律性が育まれず、自分自身で決断したり行動ができず、群れを好む傾向にある。親とのコミュニケーションが不十分であったと考えられるからである。

予測2：統制(CO)・自律性(AU)・同一化(ID)が高い場合、社会的スキルが低く、また情緒的支持(ES)が高い場合、社会的スキルが高い。家庭内での良好なコミュニケーションの多さが、社会的スキルに繋がると考えられるからである。

予測3：統制(CO)・自律性(AU)が高い場合、対人信頼感が低く、また情緒的支持(ES)・同一化(ID)が高い場合、対人信頼感が高い。子が親を信頼できている場合対人信頼感も高いと考えられるからである。

予測4：統制(CO)が高い場合、他者意識が低い。親から一方的な圧力を受けてきた分、他者に対しても一方的になり、あまり周りを意識しないと考えられるからである。

方法

1. 被験者

和歌山大学の学生80名。学年別および男女別の人数の内訳をTable 1に示す。ここでは学年ごとの人数に偏りが見られたため、1・2回生をL群、3・4回生をH群とした。以後の学年別の分析はこれらの群別で行うものとする。

Table 1 被験者の内訳

		性別		合計
		男性	女性	
学年	L群	20	22	42
	H群	20	18	38
	合計	40	40	80

2. 質問紙

(1) 親子関係診断尺度(EICA)

本尺度は辻岡・山本(1976)によるもので、子どもから見た父と母との関係を測定する尺度である。質問項目は40から成り、「自律性(AU)」(10項目)、「統制(CO)」(10項目)、「同一化(ID)」(10項目)、「情緒的支持(ES)」(10項目)の4つの一次因子尺度で構成されている。自律性(AU)とは親が子どもの人格を認め、子どものことは子どもに任せ、自主性を尊重している親の態度を、子どもがいかに認知しているかを調べるものである。本検査ではその反対傾向が強いほど高得点となっている。統制(CO)とは親の子どもへの統制、しつけ、訓育、勉学等への厳しさ、すなわち親からの超自我の圧力を子どもがいかに認知しているかを調べるものである。高得点であるほど強い統制を意味する。同一化(ID)とは、親が子どもと一体感を持ち、自分の延長あるいは分身として認知していることを子どももまた認知している傾向を調べるものである。高得点であるほどその傾向が高い。情緒的支持(ES)とは子どもが自分の親が自分を支持してくれていると認知している傾向を調べるものである。この尺度は親が現実にもそのような傾向を示しているかではなく、子どもがそのように認知しているか否かを測定するものである。高得点であるほど上記の傾向が強いことを示す。回答は3件法(はい：2点、？：1点、いいえ：0点)であり、最も当てはまると思うものに○をつけさせた。逆転項目は選択肢の数値を逆転させて計算する。本検査では母親との関係に限定して質問紙を作成した。

(2) 対人信頼感尺度

本尺度は堀井・槌谷(1995)によるもので、人間一般に対する基本的な信頼感を測定するための尺度である。ここでいう信頼感とは、ロッターにもとづき、他の人や集団の言葉、約束、口頭や文書による陳述をあてにすることができるという個人あるいは集団が抱く般化

された期待と定義されている。本尺度は特定の人間を対象とするのではなく人間一般に対する信頼感を測るものである。質問項目は17から成り、回答値を合計して得点を算出する。回答は5件法(そう思う：5点、ややそう思う：4点、どちらともいえない：3点、ややそう思わない：2点、そう思わない：1点)であり、最も当てはまると思うものに○をつけさせた。逆転項目は選択肢の数値を逆転させて計算する。高得点であるほど強い対人信頼感を意味する。

(3) KISS-18

本尺度は菊池(1988)によるもので、社会的スキルを身につけている程度を測定するものである。質問項目は18から成り、回答値を合計して得点を算出する。回答法は5件法(いつもそうだ：5点、たいていそうだ：4点、どちらともいえない：3点、たいていそうではない：2点、そうではない：1点)であり、最も当てはまると思うものに○をつけさせた。高得点であるほど社会的スキルを身につけているといえる。

(4) 友人関係尺度

本尺度は岡田(1995)によるもので、青年期の友人関係の特徴を測定するためのものである。質問項目は17から成り、「気遣い」(6項目)、「ふれあい回避」(6項目)、「群れ」(5項目)の3つの下位尺度から構成されている。気遣いとは、友人に気を遣いながら関わっているかどうかを調べるものである。ふれあい回避とは、プライバシーは大切にするなど深い関わりを避ける傾向を調べるものである。群れとは、集団で表面的な面白さを志向する関わり方を調べるものである。回答は4件法(非常にあてはまる：4点、ややあてはまる：3点、ややあてはまらない：2点、全くあてはまらない：1点)であり、最も当てはまると思うものに○をつけさせた。逆転項目は選択肢の数値を逆転させて計算する。いずれの下位尺度も高得点であるほどその傾向が高いことを意味する。

(5) 他者意識尺度

本尺度は辻(1993)によるもので、他者への注意の向けやすさや注意を向ける方向を測定するためのものである。他者意識とは、他者に注意や関心、意識が向けられた状態をいい、注意の向けやすさに関する性格特性を他者意識特性という。質問項目は15から成り、「内的他者意識」(7項目)、「外的他者意識」(4項目)、「空想的他者意識」(4項目)の3つの下位尺度から構成されている。内的他者意識とは、他者の気持ちや感情などの内面情報を敏感にキャッチし、理解しようとする意識や関心のことである。外的他者意識とは、他者の化粧や服装、体形、スタイルなどの外面に現れた特徴への注意や関心のことである。空想的他者意識とは、他者について考えたり、空想をめぐらせたりしながら、その空想的イメージに注意を焦点づけ、それを追いかける傾向を意味する。回答法は5件法(全くそうだ：5

点、そうだ：4点、どちらともいえない：3点、ちがう：2点、全くちがう：1点)であり、最も当てはまると思うものに○をつけさせた。いずれの下位尺度も高得点であるほどその傾向が高いことを意味する。

3. 手続き

一定数は講義中に、残りはサークル、ゼミなどの友人に個人的に配布した。その際、研究テーマの紹介、研究への協力依頼及びプライバシーなどについての説明を行った。回答について制限時間は設定していなかったが、実際に所要した時間は15分程度であった。質問紙はすべてA4用紙に印刷し、「フェイスシート」「親子関係診断尺度EICA」「対人信頼感尺度」「KISS-18」「友人関係尺度」「他者意識尺度」の順に並べた。カウンターバランスをとるために閉じる順序を変え、逆順のものと2パターン作成した。親子関係診断尺度EICAについては質問項目が多かったため2枚にわたって印刷した。

結果

被験者全体および下位群ごとの相関係数による分析の結果を以下に示す。

(1)全体について

親子関係診断尺度と対人信頼感尺度、KISS-18、友人関係尺度、他者意識尺度との相関係数を求めた結果をTable 2に示す。

親子関係診断尺度の自律性(AU)と対人信頼感尺度に弱い負の相関がみられた。親子関係診断尺度の統制(CO)と対人信頼感尺度に負の相関がみられた。親子関係診断尺度の情緒的支持(ES)と対人信頼感尺度に正の相関がみられた。親子関係診断尺度の同一化(ID)と友人関係尺度の気遣いに弱い正の相関がみられた。親子関係診断尺度の自律性(AU)と友人関係尺度の群れに弱い負の相関がみられた。親子関係診断尺度の自律性(AU)と他者意識尺度の外的他者意識に弱い負の相関がみられた。親子関係診断尺度の自律性(AU)と他者意識尺度の空想的他者意識に弱い正の相関がみられた。親子関係診断尺度の統制(CO)と他者意識尺度の空想的他者意識に弱い正の相関がみられた。

(2)L群について

L群における親子関係診断尺度と対人信頼感尺度、KISS-18、友人関係尺度、他者意識尺度との相関係数を求めた結果をTable 3(上段)に示す。

親子関係診断尺度の統制(CO)と対人信頼感尺度に弱い負の相関がみられた。親子関係診断尺度の自律性(AU)と友人関係尺度の気遣いに負の相関がみられた。親子関係診断尺度の統制(CO)と友人関係尺度の群れに弱い負の相関がみられた。

(3)H群について

H群における親子関係診断尺度と対人信頼感尺度、

KISS-18、友人関係尺度、他者意識尺度との相関係数を求めた結果をTable 3(下段)に示す。

親子関係診断尺度の自律性(AU)と対人信頼感尺度に弱い負の相関がみられた。親子関係診断尺度の統制(CO)と対人信頼感尺度に負の相関がみられた。親子関係診断尺度の情緒的支持(ES)と対人信頼感尺度に正の相関がみられた。親子関係診断尺度の同一化(ID)と友人関係尺度の気遣いに弱い正の相関がみられた。親子関係診断尺度の自律性(AU)と他者意識尺度の外的他者意識に負の相関がみられた。親子関係診断尺度の自律性(AU)と他者意識尺度の空想的他者意識に弱い正の相関がみられた。

(4)男性について

男性における親子関係診断尺度と対人信頼感尺度、KISS-18、友人関係尺度、他者意識尺度との相関係数を求めた結果をTable 4(上段)に示す。

親子関係診断尺度の自律性(AU)とKISS-18に弱い負の相関がみられた。家族関係尺度の同一化(ID)と友人関係尺度の気遣いに弱い正の相関がみられた。親子関係診断尺度の自律性(AU)と友人関係尺度の群れに弱い負の相関がみられた。親子関係診断尺度の自律性(AU)と他者意識尺度の外的他者意識に弱い負の相関がみられた。親子関係診断尺度の自律性(AU)と他者意識尺度の空想的他者意識に弱い正の相関がみられた。親子関係診断尺度の統制(CO)と他者意識尺度の空想的他者意識に弱い正の相関がみられた。

(5)女性について

女性における親子関係診断尺度と対人信頼感尺度、KISS-18、友人関係尺度、他者意識尺度との相関係数を求めた結果をTable 4(下段)に示す。

親子関係診断尺度の統制(CO)と対人信頼感尺度に負の相関がみられた。親子関係診断尺度の情緒的支持(ES)と対人信頼感尺度に正の相関がみられた。

親子関係診断尺度の自律性(AU)と友人関係尺度の気遣いに負の相関がみられた。親子関係診断尺度の自律性(AU)と友人関係尺度の群れに弱い負の相関がみられた。

考察

本研究の目的は、母親の養育態度と大学生の友人関係、社会的スキル、対人信頼感、他者意識との関連を検討することであった。これまでに得られた結果をまとめて予測1から予測4の検証と考察を行う。

予測1：親子関係診断尺度と友人関係尺度の間にはいくつかの有意な相関が認められた。まず同一化(ID)と「気遣い」の間に弱い正の相関が見られた。親から子への愛情が強く表明されていたり、過保護な傾向が強いほど、友人関係において友人に気を遣うことが多いと言える。これは、子どもが親から大切に守られながら育っていることによって、それと同じように友人を

Table 2 相関係数(全体)

		対人信頼 感尺度	KISS-18	友人関係尺度			他者意識尺度		
				気遣い	ふれあい 回避	群れ	内的	外的	空想的
E 診親 I 断子 C 尺関 A 度係	自立性 (AU)	-0.25 *	-0.17	-0.10	0.12	-0.38 **	0.02 *	-0.27 *	0.28 *
	統制 (CO)	-0.43 ***	-0.01	0.14	0.02	-0.17	0.07	0.07	0.31 **
	同一化 (ID)	0.09	-0.08	0.23 *	0.06	0.05	-0.14	0.03	0.02
	情緒的支持 (ES)	0.43 ***	0.07	0.14	-0.16	0.22 †	-0.06	0.09	-0.21 †

(無相関検定: *** p<.001; ** p<.01; * p<.05; † p<.10)

Table 3 相関係数(学年別: L群・H群)

			対人信頼 感尺度	KISS-18	友人関係尺度			他者意識尺度		
					気遣い	ふれあい 回避	群れ	内的	外的	空想的
E 親 I 子 C 関 A 断係 A 尺断 度尺	自立性 (AU)	L群	-0.15	-0.16	-0.14	-0.06	-0.47 **	0.17	-0.11	0.22
		H群	-0.34 *	-0.18	-0.05	0.31 †	-0.31 †	-0.12	-0.42 **	0.38 *
	統制 (CO)	L群	-0.37 *	0.03	0.17	-0.07	-0.32 *	0.25	0.17	0.39
		H群	-0.47 **	-0.05	0.18	0.10	-0.05	-0.09	-0.02	0.23
	同一化 (ID)	L群	0.14	-0.04	0.28 †	0.07	-0.05	-0.16	-0.06	0.39
		H群	0.05	-0.12	0.34 *	0.06	0.13	-0.13	0.10	0.06
	情緒的支持 (ES)	L群	0.28 †	0.21	0.16	-0.05	0.16	-0.18	0.02	0.39
		H群	0.53 **	-0.02	0.24	-0.25	0.26	0.03	0.14	-0.28 †

(無相関検定: *** p<.001; ** p<.01; * p<.05; † p<.10)

Table 4 相関係数(男女別: 男性・女性)

			対人信頼 感尺度	KISS-18	友人関係尺度			他者意識尺度		
					気遣い	ふれあい 回避	群れ	内的	外的	空想的
E 親 I 子 C 関 A 断係 A 尺断 度尺	自立性 (AU)	男性	-0.24	-0.32 *	-0.05	0.25	-0.38 *	-0.10	-0.35 *	0.39 *
		女性	-0.27 †	0.00	-0.41 **	0.02	-0.40 *	0.14	-0.23	0.20
	統制 (CO)	男性	-0.17	-0.10	0.24	0.02	-0.06	0.00	0.21	0.38 *
		女性	-0.60 ***	0.10	-0.20	-0.04	-0.29 †	0.18	-0.03	0.27
	同一化 (ID)	男性	0.04	0.00	0.31 *	-0.06	0.03	-0.16	0.05	-0.05
		女性	0.11	-0.20	0.19	0.23	0.07	-0.14	0.00	0.07
	情緒的支持 (ES)	男性	0.29 †	0.13	0.16	-0.17	0.18	-0.03	0.15	-0.24
		女性	0.54 ***	-0.02	0.22	-0.08	0.27 †	-0.14	0.00	-0.20

(無相関検定: *** p<.001; ** p<.01; * p<.05; † p<.10)

大切にでき、友人を傷つけないよう気を遣うようになるのではないかと考えられる。次に自律性(AU)と「群れ」に負の相関が見られた。これは、子どもの自律性を育み、子どもの自由な行動を認めるという母親の養育態度を子どもが認知しているほど、「群れ」という行動が多いことを意味する。「群れ」とは集団で表面的な面白さを好む関係であり、広く浅くという友人関係である。ここでいう自律性が高いとは、悪くいうと「しつけが甘い」とも解釈でき、子どもが自

由に外に遊びに行けることなどからこのような結果に繋がったのではないかと考えられる。自律性を重んじ、子ども自身に考えて行動させることは大切であるが、それによってしつけが甘くなってしまうように注意が必要である。そして女性に限り自律性(AU)と「気遣い」に負の相関が見られた。これは女子の方が対人的な関心が強いと指摘されており(斎藤, 1994)、相手の気持ちを考えようとする傾向が強いからだと考えられる。以上のことから、予測1はほとんど支持されな

かった。

予測2：親子関係診断尺度とKISS-18との間には男性に限り有意な相関が見られた。それは自律性(AU)との間に見られた弱い負の相関である。有意ではあったが相関係数の絶対値はあまり大きくなかった。この結果から、子どもの自律性を育み、子どもの自由な行動を認めるという母親の養育態度を子どもが認知しているほど、社会的スキルは高まることもあるといえる。しかし、母親の養育態度と子どもの社会的スキルの間にはあまり相関はないと考えられる。その要因として社会的スキルは家庭内にいるだけでは身につかないものであるということが挙げられる。家庭においてどれだけ良好な親子関係を築いていたとしても、家庭と社会は別物であり、社会的スキルは社会に触れることによって身につくものであるといえる。以上のことから、予測2は一部支持されたが、ほとんどは支持されなかった。

予測3：親子関係診断尺度と対人信頼感尺度の間にはいくつかの有意な相関が認められた。まず、統制(CO)と自律性(AU)と「対人信頼感」に負の相関が見られ、情緒的支持(ES)と「対人信頼感」に正の相関が見られた。この結果から、親からのしつけの厳しさや圧力、また、自律性を育もうとせず自由にさせてくれないと子どもが認知しているほど対人信頼感が低く、逆に、親が子に寄り添い、子どもの行動を認め、援助してくれていると子どもが認知しているほど対人信頼感が高いといえる。子どもが初めて信頼する人間は自分を産んでくれた母親であると考えられ、その母親への信頼感に比例して一般的な人間への信頼感も高まるのではないかと考えられる。つまり、母親が子どもに信頼を得られるような養育を行うことができれば、対人信頼感が低いという問題も解決できることが示唆される。また、男性に関しては、母親の養育態度と対人信頼感の間に有意な相関が見られなかった。理由として考えられることは、男性の場合、同じ性別である父親の影響の方が大きいからということである。以上のことから、予測3はほぼ支持された。

予測4：親子関係診断尺度と他者意識尺度の間にはいくつかの有意な相関が認められた。まず自律性(AU)と「外的他者意識」に負の相関、自律性(AU)と「空想的他者意識」に弱い正の相関が見られた。これは、子どもの自律性を育み、子どもの自由な行動を認めるという母親の養育態度を子どもが認知しているほど、人の外面への意識は強いが、人について空想したり考えたりする傾向は低いことを意味する。外的他者意識が高いということは人の表面的な印象に左右されやすいということであり、先述した「群れ」と繋がっているのではないかと考えられる。また、統制(CO)と「空想的他者意識」に弱い正の相関が見られた。親からのしつけの厳しさや圧力を子どもが認知しているほど、人

について空想したり考えたりする傾向が強いといえる。家庭内でも統制的な教育を受けてきた子どもは、母親だけでなく仲間との関わりにも自信が持てず、空想的な意識が多く発生するのではないかと考えられる。以上のことから、予測4は支持されなかった。

本研究の結果から、母親の養育態度と子どもの友人関係、社会的スキル、対人信頼感、他者意識には相関があるということが明らかになった。しかし、子どもに認知された養育態度が、どの程度まで実際の親の養育態度を反映しているかに関しては問題が残る。そのため母親にも同時に質問紙調査を行うことができれば、より正確な結果が得られたと考えられる。また、同じ養育態度でも子どもがそれをどのように認知しているかによって、子どもへの影響の仕方が変わってくると予想される。たとえば、「統制」といった親の厳しさを、自分のためを思っていることだとプラスに捉えることができる場合と、そうでない場合では結果が異なることは容易に想像される。そこで、そのような子どもの認知の仕方にも注意を向けた研究も今後は必要であろう。また、本研究では被験者が80名、学年別・男女別では約40名ずつという少なさであったことも問題であったといえ、今後はもっと被験者を増やして調査を行うことが望ましい。本研究では母親に限定した調査を行ったが、父親や両親にすると結果は変わってくるのかという点も興味深いところである。

引用文献

- 岡田 努(1995)現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察, 教育心理学研究, **43**, 354-363.
- 福岡欣治(2010)日常ストレス状況体験における親しい友人からのソーシャル・サポート受容と気分状態の関連性, 川崎医療福祉学会誌, **19**, 319-328.
- 原田博子(2008)母親の養育態度に関する研究(1)－育てられ方との関連－, 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要, **3**, 271-283.
- 橋本 剛(2000)大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連, 教育心理学研究, **48**, 94-102.
- 堀 匡・島津明人(2005)大学新入生のソーシャルスキルが、入学後の友人サポート、抑うつ、孤独感に及ぼす影響, ストレス科学, **19**, 245-253.
- 堀井俊章(2006)大学生における不登校傾向の実態調査, 山形大学保健管理センター紀要, **5**, 62-67.
- 堀井俊章・槌谷笑子(1995)最早期記憶と対人信頼感との関係について, 性格心理学研究, **3**, 27-36.
- 石津憲一郎・安保英勇(2009)中学生の過剰適応と学校適応の包括的なプロセスに関する研究：個人内要因としての気質と環境要因としての養育態度の影響の観点から, 教育心理学研究, **57**, 422-453.
- 菊池章夫(1988)思いやりを科学する, 川島書店.
- 小柳晴夫(1999)シリーズ「心理臨床セミナー」④：学生相談の「経験知」－大学における臨床心理学－, 垣内出版.
- 久保克児(1995)大学生の悩みとその受け止め方に関する研究－自尊感と生の肯定感との関連で－, 日本精神科学研究所.
- 倉元俊輝・大坊郁夫(2012)大学生のコミュニケーション・スキ

ルの特徴に関する研究：ENDCOREsを用いた検討。対人社会心理学研究, **12**, 149-156.

松元泰儀(1997)人間関係の変化。加藤隆勝・高木秀名編 青年心理学概論, 誠心書房.

水田一郎・小林哲郎・石谷真一・安住伸子・井出草平・谷口由利子(2009)大学生に見出されるひきこもりの精神医学的な実態把握と援助に関する研究。厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業－思春期のひきこもりをもたらし精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究, 平成20年度総括・分担研究報告書, 79-101.

水津孝紀・児玉真樹子(2016)ソーシャルスキルが友人および教師との関係、学業を媒体として学級適応感に及ぼす影響：高校生を対象として。学習開発学研究, **9**, 37-44.

村井則子(2002)母親の心理学－母親の個性・感情・態度－。東北大学出版会.

中園尚武・野島和彦(2003)現代大学生における友人関係への態度に関する研究－友人関係に対する「無関心群」に注目して－。九州大学心理学研究, **4**, 325-334.

西平直喜(1973)青年心理学。塚田(編) 現代心理学書7, 共立出版.

大坊郁夫(1998)しぐさのコミュニケーション－人は親しみをどう伝え合うか－。サイエンス社.

大鷹田美・菅原正和・熊谷 賢(2009)母子関係と子どものソーシャルスキル発達の阻害要因。岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, **8**, 119-129.

斎藤耕二(1994)他者の感情を理解する。菊池章夫・堀毛一也(編著) 社会的スキルの心理学, 川島書店.

嶋 信宏(1991)大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する研究。教育心理学研究, **39**, 440-447.

白井利明(2006)現代青年のコミュニケーションからみた友人関係の特徴－変容確認法の開発に関する研究(III)。大阪教育大学紀要(第IV部門), **54**, 151-171.

杉浦浩子・杉浦文香・杉浦春雄(2007)親の養育態度が子どものソーシャルスキルに及ぼす影響。健康レクリエーション研究論文集(実践報告書), **4**, 15-27.

Swenson, L. M., Nordstrom, A., & Hiester, M. (2008) The role of peer relationships in adjustment to college. *Journal of College Student Development*, **49**, 511-567.

辻平治郎(1993)自己意識と他者意識。北大路書房.

辻岡美延・山本吉廣(1976)親子関係診断尺度EICA検査用紙および同実施手引。日本・心理テスト研究所.

八越 忍・新井邦二郎(2007)母親の養育態度が小学生の社会的スキル、共感性、学級適応に及ぼす影響。筑波大学発達臨床

心理学研究, **18**, 33-40.

参考文献

張 愛子(2014)大学生の自己愛傾向に関する研究－親の養育態度と友人関係の関連から－。学校教育学研究論集, **29**, 1-13.

Hays, R. B., & Oxley, D.(1986) Social network development and functioning during a life transition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 305-313.

池田雄哉・菅 千索(2012)大学生の社会的スキルとコミュニケーション・スキルについて－親子関係からの影響と青年期の発達課題への効果－。和歌山大学教育学部紀要, **63**, 107-114.

岩崎和美(2010)対人信頼感におけるパーソナリティの影響について－「原子価論」に基づく実証研究－。奈良大学大学院研究年報, 15.

姜 信善・山崎悠希(2015)子どもの認知する親の養育態度と意欲との関連について－養育態度を「受容」次元からとらえて－。人間発達科学部紀要, **10**, 1-17.

松永真由美・岩元澄子(2008)現代青年の友人関係に関する研究。久留米大学心理学研究, **7**, 77-86.

永井曉行(2018)ソーシャルスキルと態度による大学生の友人との付き合い方の分類－友人関係による居場所感の違い－。教育心理学研究, **66**, 54-66.

中井寿栄・菅 千索(2012)日常生活スキルと社会的スキルが大学生活に与える影響について。和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, **22**, 63-70.

島 義弘(2014)親の養育態度の認知は社会的適応にどのように反映されるのか：内的作業モデルの媒介効果。発達心理学研究, **25**, 260-267.

鈴木真波・浅川潔司・南 雅則・祁 秋夢(2011)大学生の友人関係に関する社会的スキルと登校回避感情の関連に関する研究。学校教育学研究, **23**, 27-33.

豊田弘司・森田泰介・岡村季光・稲森涼子(2008)大学生における他者意識と情動知能の関係。奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, **17**, 29-34.

渡部麻美(2015)大学生の「コミュニケーション力」に対する態度の探求的検討。東洋英和女学院大学「人文・社会科学論文集」, **33**, 75-92.

山下茉実子・石曉 玲・桂田恵美子(2010)大学生の親子関係・自尊感情・生き方志向と子ども時代の両親の養育態度との関連－過保護という養育態度の検討－。臨床教育心理学研究, **36**, 21-26.